

マネル・ケラル
(MANEL QUERALT)

バクー
苦悩する者

日本語訳

木村有紀子

(YUKIKO KIMURA)

まえがき

この本を手に取り表紙を開けて、サグラダファミリアの螺旋階段の写真を見た時、読者の方々はどんな印象を受けるだろうか。地の底に果てしなく沈んでいくようにも、或いはまた、延々と終わり無い天空を求めて上へ昇っていくようにも感じるのだろうか。

このサグラダファミリアは、スペインの北東部にあるカタルーニャ地方が生んだ奇才の建築家アントニオ・ガウディの作品の一つであり、その螺旋階段は一本ではなく、現在完成している八本の塔（鐘楼）の中を蟻の巣のように巡っている。ガウディはこの螺旋階段を通じて、一つの目的に達する道は一つではなくあらゆる道が一つの目的へと導いていくのだという考えを表そうとしたと言われている。

今では、毎日何千人もの観光客がこの螺旋階段を上がり降りしているので、サグラダファミリアを訪れ、塔にも上ったことのある読者の方々はまた違った印象を受けたかもしれないが、殆ど人が訪れることもなかった頃のサグラダファミリアの螺旋階段の中は、一種不思議な空間で神秘的な雰囲気すら醸し出していた。このような空間に人が住んだりできるものだろうか。

読者の方々は読み進むうちに、作者のマネル・ケラルはバクーという人物に、人間の一生を投影しているのだと気が付かれるだろう。作者は登場人物であるバクーを通じて人間の一生を表現すると同時に、現在の我々が送っている一生に対する批判も込めているのである。つまり、もしバクーの人生が人間の一生を表しているのだとすれば、我々は彼の行動や振る舞いの中に一度でも

何か知性のひらめきを垣間見ることができるだろうか。最後の瞬間にバクーは自分の人生に起こったことを全て認識し、まさにその最後の瞬間に自分に絶え間ない苦しみを与え続けた『運命』を許容し、自分の人生を達観しているという印象を与えている。強いて言うなら、彼なりの知性を示した唯一の瞬間とすることができる。

また、自分と同じような姿をした何者かとセックスをする場面が出てくるが、それは言わば『シャドウボクシング』のように自分の影との『シャドウセックス』でしかなく、興奮しきったバクーのその後の自慰行為は彼に苦痛以外のものは何ももたらさなかった。つまり、そこには何の実りもない不毛な行為しか存在しないのである。

ここでマネル・ケラルは現在の我々が日々の営みを送っている空間、物や食料が溢れている『豊かな生活』と言う名の空間をバクーが過ごした螺旋階段の空間と比較しているのである。我々は、その空間に例えられた人生の中で文化的には何も啓発されることもなく過ごし、毎日同じ事を繰り返し、年老いて何も得ることもなく生み出すこともなく死んでいく人生を送っているのである。その意味で、マネル・ケラルの作品は今現在の我々の生活や人生への警鐘とすることができるだろう。

しかし、恐らく、読者はこの作品を読み始めて前半は理解しにくいものを感じるだろう。これは作者のマネル・ケラルはカフカからインスピレーションを受けた回りくどい表現が好きで、わざとそれを多用しているからである。読者の方達が読み始める前に正直に言わせて頂くなら、訳者にとっても前半は時にはそのイメージを捉えるのが難しく、訳すのに苦労した部分である。

とは言うものの、この文章から谷崎潤一郎の随筆『文章読本』の一節を思い出すことができる。その随筆の中で谷崎は、文章の調子を《流麗な調子》、《簡潔な調子》、《冷静な調子》、《飄逸な調子》と《ゴツゴツした調子》の五つに分けている。

谷崎に拠ると、《ゴツゴツした調子》で書かれた文章は悪文だという感じを受ける。しかし、これは言うならば、読みながら岩だらけの険しくて通るのが大変な道を歩くような印象を受けるわけである。しかしながら、このような歩きにくい道にも例えられるような読みづらい文章を読んだ後には、より力強くてはっきりとした印象が残るのである。逆に、《流麗な調子》の文章を読んだ読者は一気に読んでしまうこともできるが、その代わり読後には何も覚えていない、ということにもなるわけである。¹

つまり、この作品の最初の部分は作者のケラルがまるで谷崎言うところの《ゴツゴツした調子》を使ったようなもので、くねくねと曲がりくねった険しい薄暗い道を進んで行くような印象を受けるだろうし、それは正しくこの作品の主人公であるバクーが住んでいる世界にも結びつくのである。しかし、後半に入るとずっと読みやすくなり、それは《流麗な調子》で書かれているようでもあり、そこまで辿り着いた読者の方達の前にはそれまでの《迷いの闇》は晴れており、もう手探りで読み進む必要はなくなるだろう。

ここで言えることは、マネル・ケラルはこの作品の中で二つの調子を折衷するというスタイルを取って

¹ 谷崎潤一郎著『文章読本』より引用。中央公論社より1934年初版

いる。この異なる二つの調子を取り入れることで、作品の流れにはっきりとしたコントラストが生まれ、それによって読者は終始続く回りくどい表現に疲れることなく作品の世界に入りこめる効果を生んでいる。

話は替わるが、ここでカタラン語に関して簡単にご紹介しておく。カタラン語はラテン語から派生したロマンス語に属する言語で、世界中で約950万人の人々に話されている。18世紀以来、カタラン語の公的な使用は何度か禁止されたことがあるが、一番最近ではプリモ・デ・リベラ将軍の独裁統治下（1923-1930）とフランコ将軍の独裁統治下（1939-1975）においてである。カタラン語の存在はすでに9世紀まで遡ることが文献などによって立証されているが、13世紀初めに著名な言語学者ラモン・リユーイ（1232-1316）の功績によって文学的な言語に位置づけられるまでその言語的価値は認識されていなかった。今日では、カタラン語はヨーロッパ、アメリカ、中南米諸国の数多くの大学で講座が設けられており、日本でも多くの語学センターで研究が進められている。

本書が読者の方々にカタルーニャ地方にはサグラダファミリアなどの観光モニュメントのあるバルセロナだけでないことを知らしめることができ、またカタルーニャ地方の言葉であるカタラン語を少しでも知って頂ける参考になって、この土地の文化や歴史に少しでも興味を抱いて頂ける契機になれることを心から望んでおり、またその一助になれたなら、訳者としてこの上ない喜びである。

木村有紀子

2008年1月吉日、バルセロナにて

バク
苦悩する者

『人は習い人、痛みはその教え人』

アルフレッド・デ・ムセー

『現実の世界とは余りにもかけ離れて、思うように想像した世界でも、何らかの形で現実の世界と共通した点があることは明らかである』

ルードヴィッヒ・ウィットゲンシュタイン

『実際、動物でも人でも、生きているものは誰でも生きたいんだ。そして、その思いは耐え難い痛みのような例外的な状況においてのみ、消え去るのだ』

エリック・フム

.....

.....

壁と壁の間を続いていく御影石でできた螺旋階段と、岩を削り貫いて掻き削ったような通路のある余り高くない天井。そこは多分、丸味を帯びた形を与えているその表面に人の目が届くことはないが、そこにある秘密をも誰にも見せようとしなかった。エネルギーの吐息がその石のほんの僅かな部分の上を吹き抜けて行ったのか、或いは一つの命を与えることになったのか、または歴史のこの瞬間に、その後でこの混ざり合ったものがここまである種の確信をもって我々を引きつれてきた曖昧で解きほぐされた進化に置き換わるために、決定的で驚嘆すべき変化を味わったのかを深く考えさせられるだろう。恐らくこれから先、あの話に出てきた生きているもの達が次から次へと現れては能力のあるものを選別し、そうでないものを横に押しつけるようなことを考えたとしたら、それは我々としては限度を越えたことをしてしまうのだろう。存在していたとは断言できないような非常に古い生き物達や不特定の生き物達。

何故なら、誰も彼らを見たことはないし、信用するに足りる形跡をつかんでいないわけでもないし、さらには、我々としては現実からはそんなにも懸け離れていると恐れることなく、まずまず起こりえないその生き物達の存在について考え得ることに反して、彼らが岩の中に階段を割り貫いたのだという結論に達するだろう。

それと同時に、ここに例として使っているような仕事の始まりの『何故なんだろう？』について、それがどんなに小さな動機であれ、その謎解きに取り組んでみるというとても大仕事を自分自身に課することができるだろう。

しかし、過去は私達の前に曖昧な姿でしか現れてくれないし、何が原因だったのか特定することは不可能なことで、だから自分達としてはその根源を知らないという事実を背中に負って行かなければならないのだった。つまり、階段に属すると考えられるものは全て、その始まりのように我々の前から逃げてしまうのだった。

私達には中が全部真っ暗だと肯定することはできなくて、多分、はっきりとしたことは分からないので間違ってしまうかもしれないだろう。

しかし、内部にはどこから発しているのか分からない弱々しい光りが差しているのだった。

それは、不確かな見知らぬところから出てくる光りで石の肌に何世紀にも亘って染みこんだ

明かりだった。

もし誰かが軽率にも（何故そんなことをするのかは測り知れないだろうが）トンネルに入り込み、階段を上ろうとしたなら、ひとたび中に入った時に一体何が起こり得るのか分からないことを推測できるのだった。さてそこで、本当だとは思えないあらゆる予測に反して、肯定されたならば私達が驚くのは確実なことだったが、しかし、誰かが岩の中に住んでいるのは間違いなかった。どんなに遙か遠い彼方から来たのかも分からず、それがどこなのかを感じ取ることもなかったが、それは我々にとっては未知の暗闇のずうっと深いところから遡ってきた何かだった。

.....
《. . . にじゅうごまんさんぜんにじゅうさん、
にじゅうごまんさんぜんにじゅうよん、
にじゅうごまんさんぜんにいじゅうご. . .
おい、気を付けるんだぞ。 何故、ここでいつも
お前さんは混乱して、また数え直すはめになる
のかよおくよおく考えるんだぞ》。

.....
誰かが話してる声が聞こえるって？
すでに予感していたことが本当だと分かっても私達は
驚きもしなかった。
でも、その辛い作業の性質から、最初に話に出た非常に
粗野であるだろうと思われる天然の鉱物性の生き物の
どれかのことだとは思えなかった。

むしろ、もっと発達を遂げたより繊細な生き物であって、もしこの新参者の住人を人間と呼ぼうとするのであれば、きっと近いうちに私達がそれを認めるだろうというのは間違いなかった。

そこで、見知らぬ世界にやって来ることを自分の意志で選べたかどうかということや、どうして人間が暗闇の中に留まろうとしたかを予想しなかつただろうということにに対して絶対に我々の意見は一致しなかつただろうから、思うようにいかない日や、或いは、いつも皆の好みに合う意見があるわけではないと考えたり想像したりできることだろう。

彼は目に映る物をその小さな脳みその中に貪欲に飲み込もうとして初めて目を大きく開いただろうし、そしてもし偶然にも我々がその場に居合わせたなら、彼のその無邪気な微笑みを垣間見たことができただろう。

しかし自分達の関知するところでは、子供が立てる泣き声も赤ん坊が喉を鳴らす音も聞いたことはなかつたので、具体的に誰かが生まれたと言うことはできないはずだった。最もあり得ることは、誰か人間のことを言っているのだろうけれど、自分達はそれを二度とは言わないし、ただそれは

弱いもので、もし生きることの底知れない深みを覗き込んだなら、最後には挫けてしまうだろうということを知っているにすぎない。
未だに、我々は彼の名前を知らないでいた。

.....
この階段が存在するのはそこにバクーが住んでいるからで、彼がここにいる限り存在するだろう。さて、それを肯定も否定もしたくはないが、もし彼が外に出ることに成功した時にのみ外界に出たとして、その時には階段は消えてしまい恐らく二度と見るできないという究極の危機に直面することになるだろう。
だから、中にいて階段の数を数えているうちは、上に行こうと下に行こうと思うがままに往き来することができるが、もしうっかりと気を逸らしたらそのまま夜の暗闇に消えてしまうことだってあり得るだろう。

このバクーの行動はどこにでもいる見習いの動きのようなもので、他の事を考える前に階段を行ったり来たりすることや、自分の周辺を認識するという方向付けられた動きを何度も何度も嫌になるほど繰り返し要約して、その後の深く時間をかけた消化を通じて確固としたものにして自分のものにするのだった。

そして多分そんなに軽々しくにはなく、寧ろ、その傾斜は急だが単調な地形を特別な形で廻り

巡って行けるだけではなく、できるだけ上に行ったり下に行ったりできること、さらには上がり下りしながら一步一步足したり引いたりして、数を記憶に留めながら数えて行くことや、また最後にはそれと同時に、どんなに小さな目印や隠されていた意味のない手がかりにもいつも目を凝らし耳をそばだてていること、そして絶え間なく頭の中から表れてくる疑いの脅しにもかかわらず、突き詰めるためにどんな片隅も輪郭も見逃さないでいるということを実感しているかのようだった。

この階段がどんなに固いか、どんなに上手く出来ているか試してみなければならぬだろう。時間と大変な忍耐を注ぎ込んで、まるでそれが儀式であるかのように、石の一つ一つの窪みや隅を両手で追って行き、そしてこの感触が直接頭脳に届くようにしながら、平らな或いはごつごつした表面を撫でることが出来るだろう。

.....
《. . . よんじゅうさんまんにせんじゅうろく、
よんじゅうさんまんにせんじゅうなな、よんじゅう
さんまんにせんじゅうはち. . . 》

.....
習慣を守ったというのは、そうすることで不確かな
ものに進んで行くことや残酷にも滑り落ちていく
時間に何らかの形で対抗するのだという堅い信念を
感じ取っていたからだった。

石段に腰掛けて、岩に背をもたせかけて一休みして
いる時に、彼は頭の中で今までに駆け巡った道のりの
小さな記憶の断片に思いを馳せ、そして地面に腰を
落ち着けて自分の取った方法を思い返すのだった。
そこは時の流れの中で特定できない場所だったが
我々が彼を初めて見た場所で、決して確認することは
できないが、彼はすでにある種の知恵を身に付けて
いたと考えられているし、もしその時から今までに
彼の理性がつかみ得た全ての知識というのはほんの
僅かなものではあるが彼にとっては非常に有益だと
自分で信じ込んでいるものであって、それに付け足して
云うならば、その機会の大半において、それは知性の
かけらを示しているのではなく、信じられないような
愚かさだと見なすことができる行動を単なる不注意
から見誤ってしまったのだと認識することができる。

.....
いつ始まったのか、或いは、その感覚がなかった時が

過去にあったのか思い出せないけれど、それは最初は僅かな知覚のように始まり、そして直ぐに何かある種のむず痒さを持っているものが大きくなっていくのだった。

そしてただ単にそれだけでは止まらず、バキューに付きまとい続けている痛みは彼の骨の中に深く澱んでいて消えることはないのだと我々は思うことにしよう。それは慢性的なもので、特別に陰険なものだと想像することにしよう、何故ならそれは殆ど何時、如何なる時にも密かにずうっと続けて動いているという、彼をその内側から焼きつくそうとする地獄の苦しみに、我々はそれについて知らないのだが、残念なことに多分、彼の心と身体を冒しているのだろう。大事なことだとは思わないけれど、この新たな苦痛は階段を一段上がることすら引き裂かれるような耐え難い鋭い痛みの連続となって彼に襲いかかり、彼を動けなくしてしまうだろう。思い出せないほど昔からその身体中に充ち満ちていたこの痛みに対して、彼は心の中で叫んだり許しを乞うことはできただろうが、しかしそれは何の役にも立たないだろう。何故ならそのような切なる願いは無意味なだけではなく、答えを得ようとする抑えがたい

衝動に駆られるだろうけれども、しかし誰も応えてはくれず、沈黙と全く恐ろしいほどの苦しみしか帰っては来ないだろう。

.....
自分が住み付いているこの階段の空間を征服に次ぐ征服を繰り返して、我が物顔に占領したバクーはその長く曲がりくねった広がり全て自分のものにする資格が自分にはあると考えたのだった。
恐らくほんの数えるほどの回数だが、時々には本当に得意気に自信や新しく湧いてくる力に昂揚するのを感じるのだったが、それは最近発見した新しい能力を自分で思うようにすることができると考えたからで、それは岩の間に割り貫かれた通路に過ぎないのだが、その世界を征服していくにつれて、そして彼も自分を支配している最も単純な規則の幾つかを感知していることを認識していくにつれて、最も卑屈ではない言葉で言うなら、そうして彼が彷徨っている儼くさい空間に関する知識を広げていったのだった。
しかし、またこの同じ理由から、彼は階段がまだまだ包み隠しているかもしれない秘密の前に段々と小さく

なっている自分自身の限界を認識することも知っていた。

自分が置かれている微妙な状態に気付いていたのだった。

もっと上に進むと、他のどんな残酷で凄まじい苦しみに襲われるのか見当の付かないことが彼を苦しめるのだった。

彼のように弱い生き物に何を期待することができただろうか？

そこで、バクーは確実に襲ってくるだろう危険すら知り得ないで先に進んで行き、いつも慢性的にしつこくつきまとっている絶え間ない心身への拷問の痛みに甘んじるのか、或いは、後戻りして階段を降りていき、この上もなく弱り果ててしまったその瞬間には下に落ちるに任せてしまい、何も苦勞をする値打ちはないんだと考えてなすがままに身を任せてしまうのか選ぶ必要があった。

薄暗がりの中に身を寄せていると、後戻りして彼にとっては手慣れた安全と感じられるどの方法でもいいから、兎に角何か一つの方法（我々は、恐らく、たった一つしか知らないと思っているけれど）をまた見つけようという思いに駆られるのだった。しかし、もし彼がその弱々しい記憶力を見せることを大切なことだと我々が思いたくないならば、

バクーは自分の語るべきものを持っていないのだとやり過ごしてしまうことができ、彼はまるで存在しなかったかのようにになってしまうだろう。

しかし、我々が今そうは考えていないというのは、そう考えることは馬鹿げた時間の無駄になるだろうし、それに最も興味があるのは前に進むことであり、調子を崩すことではないからだった。

前向きなバクーは僅かにほの見える見知らぬ可能性に身を任せて流されて行き、階段の情緒的で感覚的な内的世界と結びつくがままに任せて連れ去られて行こうとしていた．．．。

しかし、本能という機械はそこに抑えることのできない情熱や幻想や不安や苦悩を注ぎ込むことができるので、ある種の身震いや恐れを生じさせるのだった。

そうするならば、もしバクーが新しい場所を見つけたいと望めば、階段を上に向かって、疑問の波に揺さぶられながら、深みを究めながら、取り得る行動のそれぞれに参加しながら昇っていく必要があり、さらには新しい行動の分野を手探りし、ある種の洞察力を身に付けた時に、しかるべき行動を取らなければいけなかった。彼が実行するつもりでいたこの行動の計画はその記憶の中に留められており、もし時宜を得たものであったなら、階段の他の部分でまた使うつもりだった

し、もし役に立たないものだったならば使わないつもりだった。

もっと先になって、その時の状況がそれを必要とした時には、バクーは昔の苦しく困難だった障害をまた改めて乗り越えるために、以前の非常に似た状況、それは例えば、昔からよく我々は『無能力』と呼んできたように、同じ石段に何度もつまづいたり簡単に転んだりすることが頻繁にあったということに思いが行くのだが、そういったことに直面した時の作戦に戻るつもりだった。

いつも不安げで不機嫌そうにしている、彼の痛めつけられた神経に安らぎを与えてくれる決定的な発見を期待しながらまた前進して行くのだった。頭の中で聞こえていた声が話し始めた一人語りは別のつぶやきを呼び起こし、そうして何度も繰り返す繰り返す、頭の奥深い処で無限に続いていくのだった。

何が彼を不安にしていたのだろうか？ 何が彼を押しやり、どこから彼の動揺は出てきていたのだろうか？

.....
《ろくじゅうろくまんよんせんひやくに、
ろくじゅうろくまんよんせんひやくさん、
ろくじゅうろくまんよんせんひやくよん. . . 》
.....

彼を困惑させる内的エネルギーがあつて、もし今
感じている興奮を表現しぶちまけることができない
のであれば、彼の不快感はさらに膨れあがっていく
だけだろう。

身を投げ出したなら、石段が頭や背中やお尻に
突き刺さるように当たるので、彼は目を閉じて時の
流れについて考えるのを止めた。

片手がしょぼりしたペニスを探りあて、その先端
と汚れた睾丸を撫で回し、他の自分とは違った人を
想像できないので自分と同じような姿を思い浮かべる
のだったが、その誰か彼と同じように裸の男がその
そそり立ったペニスで脅すのを想像すると、その男
は彼の体の上で両足を開き、彼の口に固くなった
ペニスを突き入れ、彼の髪を掴んでは自分の方に
引き寄せ自分の快樂の要求に上手く合わせて彼の
頭を動かす一方で、バクーはその動きに調子を
合わせるために相手の尻にしがみつくのだった。
二人は、長い間、興奮の極みにいた。

バクーはそのような垂れたペニスが如何に段々と大きくなっていき、その欲望の存在を見せつけているのを少しずつ自分の手の中に感じるのだったが、その結末は目に見えていた。

クライマックスに達した時に、偽物のもう一人は消え失せ、引き返す道もないその一瞬にオーガスムの濃い霧に彼の身体も頭の中も包まれるのだった。それは、全ての血液がセックスに凝縮される瞬間だった。

しかし、突如として、まるで太い針が彼のペニスを刺し貫くような凄まじい痛みを感じるのだった。

この痛みと快樂のふたつが溶け合った混ざり合った経験を言葉で言い表すことができなかった。

それは、血の気を帯びた赤い肉の塊で、射精のその瞬間に精子が吹き出して彼の手を汚し、どろりとした液体が地面に飛び散る避けがたい最後の瞬間まで異様に膨れあがるのだった。

苦痛に身を振らせた後、心臓は元の落ち着いた調子に戻り、呼吸は深くなるのだった。

冷たい石段の上に顔を伏せて、バクーは興奮の後に訪れる沈黙を認識するのだった。

快樂は訪れては去っていく贈り物のようなもので、僅かの間、余りにもはかない間しか続かないものだが、苦しみはずっと長い間続くという恐るべき力を持っている。

バクーは痛みと共存することを身に付けるしかなかった。

.....
日が過ぎて行くと共に、ほんの僅かな見過ごしが彼の苦しみをまた見つけだすかもしれないし、将来的には、それが我慢できないものになるかもしれないので、石段のことを常に考え続けて決して気を逸らさないようにすることが心の底から必要になってきた。

多分、バクーは余りにも沢山のことを覚えるだろうと思いながら自分で自分を騙していたが、実際には彼が根本的なことに目を留められる能力があるかどうかは我々にも分からなかったし、これが彼を取り巻く薄暗い環境である階段の周辺や自分自身に対する適切な態度を頭の中で整理し、認識することを邪魔するかもしれない。

もし彼が階段を進んで行ったなら、階段はそこには留まっておらず、目の前からは消えてしまい、いつも違う石段があるということを理解するのを後回しにするのだった。

バクーは長い間、この二枚の壁の間に閉じ込められていて、彼はその努力の大部分を全ての石段を足したり引いたりすることに費やされなければならなかったが、

それはもっと何年も後に、もうそんなことをする必要はないと思える時でも、それはずっと続くようだった。

絶え間なく繰り返される段数の数え上げることだけに没頭する彼自身を見ると、全てのエネルギーを無理矢理にも注ぎ込む危険性があり、ひいては、何故自分が存在するのかという問いかけへの探求を妨げ貧弱なものにしてしまう危険性があった。バクーは彼のような生き物、或いは彼とは異なった生き物には一度も出会ったことがないと考えたが、最終的にはその考えは夢遊病にすり替わってしまうような奇妙な懐かしさを彼に予感させるのだった。彼は独り言を話し、それはまるで彼の横を歩いている誰かに話しかけるかのように口を歪めて話すのだったが、勿論、我々は誰もいないことを知っているわけで、だったら一体何故そんな事をしたのだろうか？彷徨える狂気の小道を探りながら、自分を引きずり込む『無』と『虚空』の中に迷い込んだ彼は、僅かな自信しか持ち合わせないが、自分よりも上にも下にも生じる暗闇という、それら全ての夜の世界と共存するための最低限の能力がある生き物であることを見せつけるのだった。

つまらない行為やもっと見当違いな行いが彼を無意味に苦しめるのだったが、彼は彼であらゆるごく些細で何の足しにもならないようなことまでも余りにも真剣に受け止めることに執着しているのだと我々は断言することができるだろう。

もしそれをつぶさに調べてみたならば、彼の切り刻まれた身体や痛み、あらゆる言葉の全てを失なったこと以外は何も見あたらない時の流れの中に凍った瞬間がいくつかあるのを我々は見つけるだろう。

彼の痛みは、身体と心という容器の中に閉じ込められていたものが激しく炸裂して起こった嵐のようなものだという風に我々は見なすだろう。バクーはいつも自分と一緒に、或いは、彼自身の中に存在する苦痛を自分の身近に置いていて、外部からそれを観察する全ての可能性からは遠く離れていて、つまりはそれがどこからやってきたのかを見つける可能性からも離れていたのだった。歯を食いしばり眉をしかめて、不機嫌そうな目付きだけど、目そのものは虚ろで、狂気を帯びたその瞳の真ん中には白い点が浮かんでいて、毛は逆立ち、頭蓋骨にはひびが入り、絶え間なく震えている体からは救いを求める短い呻き声とすすり泣きが漏れるのだった。

.....
思いを巡らせた時には、その限りのある最低限の知識にも拘わらず、その身を苛まれるように

苦しい孤独の全てを包み込むような『絶対』をそれとは知らずに探していて、おおよその結論や、或いはある種の軽い予感にとらわれることがあった。しかし、いつもそれ程彼の気を揉ませるそれら全ての理由付けは、ただ単にその本当の名前を見つけることが不可能な彼の身代わりを連れてくるに過ぎないという確信に辿り着くのだった。

恐怖のために汗びっしょりになり、恐るべき『無』の空虚さが彼を捕らえて離さないのだった。そして、その思いに捕らわれた心の中から湧き出てくる感情は現れては深い淵の底に落ちていき、そこからは誰も甦って来ないと彼は固く信じていたのだった。

.....
《はちじゅうよんまんごせんさんじゅうご、
はちじゅうよんまんごせんさんじゅうろく、
はちじゅうよんまんごせんさんじゅうなな. . .
もし今、僕が倒れたら、誰も僕の後ろから来ない
だろう。

この苦しみはどこから来るのだろう、この黒い
痰は？ このどろどろした唾はどこから出て
くるのだろう？》

.....
そうして、突然、言葉を失い白い薄膜が眼の虹彩を
覆い、たちまちのうちに青い稲妻が彼の瞳に穴を
穿ち、濃い霧がその意識を包み込むのだった。

頭の中で多くの声がまた聞こえてきたが、それが何を意味しているのか彼はよく知っていた。

.....
目眩、困惑、苦悩そして妄想。 金切り声を
挙げている死にかけて子供達の幻想

.....
その状態は、麻薬の効き目が引き起こした酔いの後、
その酔いから覚めた時のようだった。
不快な後味や口の中がねばねばになっているのを感じ、
体はその湧き起こる余り心地よくない感覚に満ちて
いくのは長い旅の後で立ち止まるようなもので、
小気味よい歩調を止めたその瞬間、彼の中で様々な
声が響くのに十分な沈黙が湧き起こるのだった。

.....
目眩、困惑、苦悩そして妄想。 叫んでいる
男や女達の幻想

.....
上か下か分からないが、もっと先に進めば、何か崇高な、
或いは何か素晴らしい答えを見つけられるかのように、
時間を無駄にしないために階段を登っている間、いつも
他のことを考えているのだった。
しょっちゅう、体を曲げながらこの謎についての考え方を
訂正したが、そうすると探していたものが分かった

ような気がした。
また別の時には、取り止めもなく考え続け、その言葉に表すことが不可能な名前の探求をついに止めるまで自分の思考の中に迷い込むのだった。
しかし、何らかの利用価値があると思える他の問題から気を逸らされないように、これらの考え事を遠ざけたいと思うのだったが、そういう時に限ってそれらは折り悪く、より強烈に現れ始めるのだった。彼は完璧になりたいために限界まで努力するのだったが、彼は自分の無能さの根源である自分自身の弱さの条件を脱ぎ去ることを知らなかった。
バクーの頭の中で生まれ、ゆっくりと芽を出していたどうにも説明のつかない事がいくつかあった。それは、薄暗いイメージや、失われた記憶や遠い処から出てくる議論だった。
それは余りにも漠然としていて、表現したり解釈したりするためのその形もシンボルも見分けることができないう所から、灰色のつむじ風が彼の意識に辿り着くのだった。
現実の手に触れるものになろうとする権利を求めて、何が意識の表面へと現れてくるのだろうか？
バクーは心を動かし、身をよじって石段から立ち

上がり、そして階段を上がることを絶対に止め
ないで、ここ最近そんなにも彼を待ち伏せて、物陰
から伺っているその振る舞いとは一体何であるのか
自分に問い始めました。
今になって気付いたけれど、何故以前は気付かなかった
のだろうか？
それがもう一度現てくるのを試したくて、その不安な
思いが始まったのはいつだったのかその正確な瞬間を
探して自分の思考の中で後戻りしてみるのだった。

.....
彼は自分を包み込むほの暗い明かりと、彼のこめかみを
圧迫する暗い沈黙の同じ環境の中にいつも住んでいた
ので、もし来た道を歩き直せば、今いるこの現在まで
彼を連れてきた事実の最初の原因、そしてここから先の
道標となるべき事実の最初の原因を発見することが
できるだろうと信じているのだった。

しかし、そんなにも長い時間の後、バクーのように
この階段の暗がりの中で、その両肩から恐怖と暗闇を
引きずりながら休む間もなく闘い続けてきた者にとって、
求められていた努力は余りにも大きなもので、記憶の
中で探し出されたその瞬間からこの地点までの帰り道
の途中には何も起こらないように、バクーは固く目を
閉じてあらゆる障害やありとあらゆる奇妙な思考を

押しのけながら、まるで彼を捕らえてその皮膚を
引き裂き苦痛の限界に達するまで深い傷を作るような
恐ろしい痛みで彼を包み込んでいる棘だらけの針金
を引きちぎりたいかのようにぎこちない両手で顔や
体を撫でさすのだった。

.....
目眩、困惑、苦悩そして妄想。 金切り声を
挙げている死にかけた子供達の幻想
目眩、困惑、苦悩そして妄想。 叫んでいる
男や女達の幻想
.....

そうすると、今までこんなに集中したことがなかった
ように思え、またその深く物思いに耽った状態から気を
逸らせるものなど何もないようにも思え、そこで彼は
自分を苦しめているこの苦悩に対して反抗したいかの
ようにまた次のより崇高な試みをするための取り組み
を始めるのだった。

しかし、再度試みた後、また『無』の空虚感を味わった
彼は立ち止まってしまい、暫くはもう何も考えようと
しなかった。

すぐに、何故だかは分からないが、階段の段数をもう
一度数え直したいかのように、また登ったり降りたり
することを何度も繰り返すのだった。

そして、それは手に触れることができる世界が与えて
くれる安心感だった。

彼は自分の記憶を辿る旅は失敗に終わったことを知っていたので、幻滅が非常にはっきりと目に見え、以前より自分をもっと惨めに感じた。

.....
《ひやくじゅうまんごじゅういち、
ひやくじゅうまんごじゅうに、
ひやくじゅうまんごじゅうさん... 》

.....
この岩に穴を割り貫いて上へ上へと登っている階段の壁はパツクリ口を開けたひび割れで一杯で、そこからは膿のような液体がにじみ出していたが、それはバク自身に付けられた傷だった。

延々と果てしなく続くその階段のトンネルの中に彼はうち捨てられ、その終点に辿り着くこともできなければ、終点がかすかに見えることもないのにその中を上に行ったり下に行ったりするのだった。

彼は走った、そして汗は血だと思おうと、壁から滲み出しているいやな臭いのする膿はどろっとした血に変わり、ゆっくりと石段まで滴り落ち、彼の裸の足を濡らすのだった。

空気が耐え難い程に息苦しくなった時、暗闇が彼を取り巻き、怒りに燃えた巨人が彼をその両手の中で押し潰すためにすくい上げたかのように、彼を圧迫するのだった。

どんなに恐怖におののいて、助けを求めて叫んでも金切り声を挙げても、誰にも聞こえないということを彼は知っていた。

そして体が棒のようになって、もうこれ以上先に進むことができなくなった時、こめかみに強い脈動を感じ、心臓が自然と落ち着きを取り戻すことはないだろうから、その動きを止めて落ち着かせたいと、その苦しみから解き放して休ませてやりたいと思った。

絶え間ない危険にさらされ、目覚めている時と眠っている時の境界線、真実と非現実との境目は起こり得る障害や、仕掛けられた罠や一步踏み出すごとに足下にパッキリ開くかもしれない落とし穴から守られていない空間で、例え一度もそんなことが起こらなかったにしても、彼は信用していなかった。

いつもそこに考えが辿り着く度に、彼の両足は力を失いふらふらしながら、落とし穴が彼に不意打ちに合わせるかのように、ゆっくりと登って行くのだった。

彼の人生のように余りにも機械的な人生では、明日には何が起こるのだろうか？

それに、昨日や一昨日では何が起こったんだろう？バクーの頭の奥深い処で、全ての思考は消え失せてしまっていた。

だから、時を再現しようとするのは無駄な労力で、全ての努力は意味をなさなかった。

ある日、我々の耳元で囁くような微かな声を聞いた
ような気がしたけれど、注意を傾けてみた後、
そんな筈はない、あり得ないと思って気にするのを
止めた時のように、それは殆ど感知できない程の
軽い疲れから始まったのだった。

それは、バクーがもう何も期待していなかったある日、
頭の中からその『何故？』というのをそっと取り
出してみたら、全てが崩れ始めていたのだった。
彼はまるで寒くてたまらないかのように震え、暗闇に
取り囲まれて座り込み、たった一人で泣きだした。
訪れてはこない死を望むような苦しみを心に抱いて
いるこんな不幸者をこの世に産み落とすとはどういう
ことなんだ？

.....
いいや、バクーはその孤独の中で一度たりとも分別の
ある者であったことはないし、孤独にどう対処すれば
いいかも分からなかったし、自分が不幸の泥の中にいる
ように、沈んでいる別世界の存在を何も信じては
いなかった。

さて、もう思い出せない程の長い、長い時間が過ぎ
去った後、殆ど一瞬たりとも平静でいられる時が
なかった。

何故なら、この階段の中で、最も恐ろしい夢の呻き声が
彼を追い回すのだった。

そうして、バクーが僅かに一線を越え、心が死を呼び
寄せたその正確な瞬間を見極めるのは難しかった。

不安げで、知りたいという願望があった彼が、もし自分自身よりももっと向こうを見ることができたなら、恐怖心よりもさらに先の方に目を向けることができたなら、生きることへの執着を取り戻せる可能性があっただろう。

もう随分と前のことだが、それらの声の一つが彼に話しかけた時、彼の苦しみを鎮めることができたが、今は別の声がそれを謳い上げて、そのひどい苦しみが中断した処からその苦痛の訴えをまた始めるのだった。

.....
目眩、困惑、苦悩そして妄想。 金切り声を
挙げている死にかけて子供達の幻想

目眩、困惑、苦悩そして妄想。 叫んでいる
男や女達の幻想

.....
そして、私達は何かを見落としている。 何だろう？
一体、何がこんな見る影もない生き物に、そんなにも
値打ちがあるかのように階段に執着させるのだろうか？
あそこには苦しみしかないということ自分の悲しい
経験から学ばなかったのだろうか？

彼は常に極端で孤独な努力を続け、その意識の中で、
そしてその反抗の中で一つの答えに立ち向かって
いるのだということを知っていたのだった。

奇形で、体と心の痛みに疲れ切って、弱り果てた骨の袋のようなバクーは、もう殆ど動くこともできず、裸で不摂生のために汚れきって、皮膚や唇は水膨れができて裂け、のろのろと体を引きずって行くのだったが、、、もう駄目だろう。

彼は咳き込み、むせて痰を吐いたが、それでもまだ自分の存在の重みをかけて、ゆっくりと登り続けようとして両手で階段の石段に爪を立てるのだった。

長年の絶え間ない苦痛の後、彼はある意味において単なる傷でしかなく、その性質はもう彼の苦しみとは切り離し難いほど密接に結びついていた。

階段の中では、誰かが這いずって歩いているらしい気配が消え入りそうな音になって聞こえていた。

誰か傷ついた人の声がほんの微かに聞こえていたが、しかしながら、それは本物の言葉ではなく、パツクリと口を開けた傷の叫び声に似ていた。

その時、見えたり聞こえたりしていた全てのものは永らく続いた苦しみの結果を長い時間をかけた変貌で表した一つの姿に凝縮されていた。

苦難を受けるということは、真実の運命であり、そこでは苦しむことが彼の仕事、唯一の課された仕事

として考えられることを発見するに至るだろう。
そうして、多分今になって、そんなにも苦しんだ彼で
さえもたった唯一の存在であり、たった一人である
ので、誰も彼の苦しみを軽くすることも彼の身代わりにな
ることもできないということが垣間見えるだろう。
そして、たった一つだけチャンスがあるのだが、それは
彼が如何にその苦しみを耐えるかということにあるの
だった。

さて、彼をどうしたものだろうか？　しかし、彼は
まだ続けるべきなのだろうか？

我々には分からないことだった。　バクーはこの
馬鹿げた人生の中でもう何も失うものがなかった。
そして、我々の方も、例え成功する可能性は非常に
少ないと本当は思っているにしても、その後、引き
続いて素早くその亡骸を収容するために大体一貫して
いる方法で最後の仕上げをすることにしよう。
結果はいずれ分かるだろう。

.....
《ひやくさんじゅうまんよんせんご、
ひやくさんじゅうまんよんせんろく、ひやく...
何だ？　この壁は何でここにあるんだ？
そんな筈ないだろう！　分からないなあ！
前に進めないよ。　階段が終わって、もうこれ以上
石段がないんだ...!》

.....
もう、どうにも状況を把握することができなくて、
最も恐ろしい拷問にかけられた不幸な男の口から
出たかのように、凄まじい身も凍るような叫び声を

彼は挙げたのだが、それはその存在の奥深い処から吹き出した叫び声で、我々の心をも揺り動かたものだったが、今まで長年にわたってこらえた怒りや積もり積もった苦痛を伴った叫びだった。

それは彼の命の全てだった。

しかし、我々が見ているものは何なのだ？ 一体、どうしたというのだ？

彼の全てのこの苦しみの後で、まるで見知らぬ柔らかな手が彼の体の中の傷や心の傷をそっと労り撫でるかのような、妙な安らいだ感覚が彼を包み込むのだった。

それは、突き刺されるかのような感触を恐れることなく、僅かな瞬間、静かに息をつくことだった。

その時、思いがけないことが起きた： バクーが私達の方に微笑みかけたのだ！

.....
黙るんだ、ここまで来たら黙るんだ。この全ての時の流れの中、そんなにも多くの苦しみを耐えぬいてきた病める人の前で、我々は黙って見つめることしかできないのだ。

.....
（最も大事な現実で、同時にラジカルな現実に関しては大したことは分からないのだから、何も言うことはできないのだ。昨日も存在しなければ、明日もない。今が全てなのだ。

この顕示の最後に来るものは『無』がなのか、

『超越』なのか？ 真実の、そして唯一の階段の出口は
まさに何の可能性もない処にあるのだろうか？)

.....

『語ることができないなら
黙っている方が良い』

ルードヴィッヒ・ウィットゲンSTEIN

『それとも、違うかね？』

参考文献

- (1) アルフレッド・デ・ムセー『10月の夜』（1837年）。
- (2) J. M. テリカブラス訳の『論理学及び哲学に関する論文』より。
- (3) エリック・フロム著『持つことから存在することへ』より。
- (4) ディッキンソンの詩より発想。
- (5) A. カペーリヤの『余りにも人間的』より。
- (6) M. ブランショット著『災いの書』より。
- (7) H. ブロック著『ペースナウもしくはロマン主義』より。
- (8) 法皇ヨハネ・パブロ2世の『Fides et ratio』(*)の中のカンタベリー司教からのプロスロギオン
- (9) M. プロウスト著『失われた時を求めて』から発想を得た詩文。
- (10) L. F. セリーネ著『夜の終わりへの旅』より。
- (11) M. デュラス著『苦痛』のある文章より発想。
- (12) W. A. ミトウグッチュ著『国境』のある段落より発想。
- (13) 旧約聖書『ヨブ記知恵の書』の詩文より書写。
- (14) A. カミュ著『シジフォスの神話』より発想を得た詩文。
- (15) ソフォクレス著『フィロクテテスの苦しみ』より発想を得た詩文。
- (16) ヴィクトル・フランケル著『意味を求める人』を読んで発想をえた詩文
- (17) J. M. テリカブラス著『L. ウィットゲンシュタインの論理学及び哲学に関する論文』の序文から発想を得た詩文。
- (18) A. カミュ著『シジフォスの神話』より発想を得た詩文。
- (19) 『根本的により優勢なもの』、バクーの体験の遙か彼方に存在するもの。

(*) ラテン語の原題のまま

エピローグ

ケラルに拠るところのバクー、或いはシシフオス

『バクー、苦悩する者』（2004年）は今の処、マネル・ケラルの詩作の頂点を極める作品である。僅か1ヶ月で書き上げられ『ミセレーレ』の殆ど直後に出版されたが、この作品の中で、テーマは日常を前にしてその不安を表現する詩的存在が叙情的観点から取り扱われていて、彼のそれまでのどの長編詩よりも哲学的な広がりを見せており、人間や世界、或いはその創造的過程の後ろに存在する人間のビジョンを明確にそして簡明に示している。従って、ケラルの詩の世界に入り込みたいと思う読者には、この作品から読め始めるのを勧めるのが良いだろう。というのも、主役であるバクーの生涯を通じての体験が表している明確さを読めば、作者の実存的な概念の核心を見つけることができるし、その終わりは弁証法をもってして、50年代や60年代の人々が抱えていた困難よりも現在の人々が抱えている困難により即していて、実存主義の壁を越えているからである。

『バクー、苦悩する者』を読むと、アルベール・カミュの作品で、『不条理な人間』を収録している同名の貴重なエッセーの中で展開している、シシフオスの神話に関する解釈を考えない訳にはいかない。シシフオスはゼウスから、坂の上まで大きな岩を永遠に押し上げるという罰を受けていた。岩が頂上に乗ったかと思うと、また岩そのものの重さで下まで転がり落ちてしまい、シシフオスは再び

同じ事を繰り返さなければならなかった。バクーは岩の中にある通路に住み着いており、そこには一本の螺旋階段があるだけだった。彼の存在はその階段を登るか降りるか、もしくはそこにじっとしているかに留められていた。我々が知る限りでは、バクーがそこに閉じ込められているのは彼のせいではなかった。もしそうだったとしたら、多分、何故そこにいたのか、という問いかけに答えが見付かっただろうし、そこに何らかの慰めを見いだせただろう（これはカミュもケラルも避けているキリスト教的考えで、原罪による人間の苦しみを正当化しており、ある種の逃げ道を与えているのである。しかし、バクーは『別世界の存在を何も信じていなくて』、『不幸の泥の中』に沈んでいたのだった）。

タルタロスの日の差さない世界に閉じ込められたイクシオンやタンタロスのような他の神話の登場人物と違って、カミュがシシフォスの神話に興味を持ったというのは罰が時間的な広がりを見せており、時間は必然的にその意味の質問を投げかけてくるからだった。しかし、どこかに辿り着くという多大な努力の理由は、存在するに留まっているこの世に属するのではなく、人間に属するものである。『不条理は人類の救済とこの世の不合理的な沈黙の対峙から出てくるのだ』（シシフォスの神話）。一個の人間を実存的に位置づけるこの一時性の中で、カミュはサルトル（感覚をもたらす者の様な絶対的な自由）やジャスパー（超越の『遭難者の板』）のように逃走の形では巡っていかない。人間の品格は勇気を持って、しかし闘争精神を否定することなく（反抗する人類）、その不条理を認識し、それを受け入れることで救われるのである。バクーの詩におけるケラルは存在の時間的広がりとその不条理を認識しているのである。しかしながら、カミュとの違いは、時間的プロセスやそこに含まれる全ては内部、その時間そのものの中に

存在しているということから明らかで、彼のようなトリックを使ったりはしない。次のような文においてそれが見て取れる：

バクーはいつも、自分と一緒に或いは、彼自身の中に存在する苦痛を自分の身近に置いていて、外部からそれを観察する全ての可能性からは遠く離れていて、つまりはそれがどこからやってきたのかを見つける可能性からも離れていたのだった。

バクーの状況の哲学的な是認を可能にする、彼の痛みの客観性はいずれにしてもこの詩の作者であるケラル自身に認識されているが、バクー自身は気付いていない。最後に見つけたその苦悩の解決策は『階段』という名の時間、『通路』という名の空間を歩き回ったことの結果だったというのは、バクーは哲学者ではなくて（ケラルはそうであるが）、究極の人的条件を提示するために、或る限定された状況（ジャスパー参照）の中に作者によって描き出された人物に過ぎないからだった。これによって、マネル・ケラルは不条理な人間について、借り物の人物（シシフォス）ではなく独自の人物（バクー）を生み出すことでアルベール・カミュよりも更に深く純粹なもう一つの解釈をするに留めていると考えることができるだろう。それはそうとも言えるし、違うとも言える。或いは、一部はそうであるとも言える。何故ならバクーの経験は、彼の人生やその野心が示している『不幸の意識』の弁証法（ヘーゲルの概念を使うならば）に拠れば、新しく決定的な要素をもたらすからであり、即ちそれは沈黙による威嚇である。バクーの危機がまさに始まった時、それは『僅かな知覚のように始まり』（『精神現象学』でのヘーゲルと同様に）、『むず痒さ』は『彼を動けなくしてしまうだろう』『この新たな苦痛』、或いは返事のない無意味な叫びの可能性となり、ケラルはその節の最後にこう書いている。

しかし誰も応えてはくれず、沈黙と全く恐ろしいほどの苦しみしか帰っては来ないだろう。

カミュの不条理な人間は話すことができ、自分の状況を明確にし、そこから意識を確固としたものに行っている。その反対に、バクーは沈黙や苦痛の底、空間や彼が話して欲しいと望んでいた限られた空間の沈黙、また彼について言えば、階段の段数を数えることや、決まった仕事や作戦（本質的な事に答えを出せない科学の隠喩）の中にどんと沈んで行くのだった。何故という問いかけに対する答えの欠乏や『沈黙』という名の欠乏は、一個の人間としての結果が引き起こすアイデンティティの失敗を伴って、それを定義づける言葉を失うという更なる苦悩を思わせるだろう。

彼はある意味において単なる傷でしかなく

そして、もしこの『弱り果てた骨の袋』の中にまだ何かが存在するのであれば、それはどこから来るのかよく分からない声であり、彼の痛みではないこの世の痛みを彼に語りかけるのだった。しかし、バクーの想定された外界もまた沈黙の世界である。何故なら、その痛みを伴う世界は根拠のないものだからだ。そこで、マネル・ケラルはその詩作『バクー苦悩する者』の中で、カミュをウィットゲンステインに対してぶつけるのである。ケラルがその詩の最後に引用している有名な『トラクタトゥス』の最後の格言は、バクーが辿った階段の道のりや、たとえその世界観がお粗末なものであったとしても彼なりに賢人になり得て最後には心の安らぎを見つけたという悲劇的な経験やがどのように解決されるかはっきりと示している。《語るができないなら黙っている方が良い》（トラクタトゥス・ロジックーフイロソフィックス）

最も大事な現実で、同時にラジカルな現実に関しては大したことは分からないのだから、何も言うことはできないのだ。

ここで、ウィットゲンスタインはケラルと同じように考えていた。それは言葉の限界を定めようとするロジックであったが、その作業にストイックなドラマ性を持って直面しようとしたのだった。そして、取り上げて話す意義のあること（ダス・ミスティチェ）は人間に根深く関わっているテーマであって、立ち入ることができないものであるということに気付いたのだった。

バクーは本質を見るという、そして心の奥底のプロセスに関する弁証法を試すという目的を持って、極限の状況に置かれた人物である。バクーの孤独や、彼の限られた非常に貧しい世界は作者によって前もって創り出された条件であって、そこには人間の主体とは『無』であり、自分自身は欠落しており、そこからは誰も見る者のいない現実に向かって開かれた窓であるということを提示しようという目的があった。世界や我々は何ものなのかを忘れるように気を逸らせるその他のものが無くして、継続を定義づける数字となる最小限の表現や空虚な時間を逃げ口上にして走り抜けられない時間の中に自分自身を投影する『私』があるのだ。それはバクーの場合には、階段が終わりにならない限り、どこに向かうでもない前進を思わせる階段の段数を数えることだった。仮にも、人間はその瞬間に立ち止まり、ひっそりとその日その日を生きる動物のようになることができるだろう。例え、私がこの説に賛成でなかったとしても、『時』によって我々はできているのだから、ケラルはその登場人物に選ぶ能力、絶対的な自由を与えてい

る。彼はそれを使って、登場人物を出発地点に戻すという《軽率な行為》を取っている。それは時間と沈黙の否定であり、エクスのような植物になることの否定である。

いずれにしても、作品を締めくくる選択の余地に賛成であってもなくても、強調されていることは、バクーという生き物は人間の排泄物であり、理由も分からずにある世界に放置されているということである。

どうして人間が暗闇の中に留まろうとしたかを
予想しなかつたらう

そして、排泄物、ハイデッガーが言うように、“排泄された状態”が影響を引き起こすことは避けがたい。つまり、時の流れの中での投影としての人間の存在が、もし本物であるとするならば、“死にゆくための生き物”としてその姿を明らかにするだろう。例えハイデッガーを読んでも、それがバクーに起こったことである。存在とは、“この世に生きるもの”ということであり、つまり、この世はそこに住むものが存在しなければ無であり、また逆に、この世無くして存在する物はいない。そこで、次の一節を見てみると、

この階段が存在するのはそこにバクーが住んでいる
からで、彼がここにいる限り存在するだろう。

しかし、バクーの世界は一本のトンネルである。我々はその余りにも簡略化された世界に何の意味を与えることができるだろうか？それを理解するためには、我々は作品から離れて、次の一節を見ることにしよう。

．．．希望はいつも苦痛を伴って突き抜けていくが、
それは永遠に続く夜の深いトンネルのようだ

信じ込んでいる。

これは、同じ作者の作品『愚か者達』の詩、第二番の一節であり、この詩によってバクーの世界は彼の希望の産物だということが明らかになる。その根底においては、彼に時空間を想像させる耐え難い苦悩による産物だと分かる。つまり、主体と対象物は相関的な要素だということだ。バクーの世界は余りにも限られている、何故なら彼の主体性が限られたものだからである。そこから逃れることはできない。

もし彼が外に出（中略）、消えてしまい恐らく二度と見ることでできないという究極の危機に直面することになるだろう。

外からやってくる声は作品中、繰り返し繰り返し響いてくる。

目眩、困惑、苦悩そして妄想。金切り声を
挙げている死にかけた子供達の幻想
目眩、困惑、苦悩そして妄想。叫んでいる
男や女達の幻想

ここでは、ただトンネルの外の現実だけでなく、バクーの投影された世界が除外している現実の様相をも暴き出している。勿論“世界”ではあるがその自分自身の世界に閉じ込められた不幸な自覚の現象学の見地から、『バクー、苦悩する者』はその彼の取りうる全ての動き、その繰り返し、そして彼の苦しみを増やすことになる新しい発見をしながら前進するために後戻りすることをはっきりと示している。登ったり下ったりする螺旋階段やその中で立ち止まったりのように、ぐるぐる巡っていく作品は始まった

時と同じように沈黙の中で終わっていく。しかし、率直に
言って、私はバクーが黙ったままではいるとは思っていない。

ダニエル・カザス・リィモス
哲学士